

## 紹介

林廣親著

『戯曲を読む術——戯曲・演劇史論』

八木橋 悠太

劇場に足を運び、演劇を観る。観劇を楽しむ人は、現在どれくらいいるのだろうか。新劇の隆盛や小劇場ブームから時が経ったが、アイドルが出演する舞台のチケットは瞬く間に売れ、劇団四季や宝塚歌劇団の人気は衰えず、その数は決して少なくないだろう。しかし、戯曲を読む人の数は極めて少数であるように思える。かつての文学者とは異なり、現代の流行作家が戯曲を書くことは希であると同時に、戯曲はあくまで上演時の台本であり、文学作品として認識されにくくなっているのが現状だろう。

林廣親氏の著書『戯曲を読む術——戯曲・演劇史論』は、このような時代においてタイトル通り「戯曲を読む」ことを主眼に、これまでに発表されてきた種々の論文の中から、戯曲と演劇史に関するものを一冊にまとめたものである。取り扱われている戯曲は、森鷗外や谷崎潤一郎のものから、井上ひさしや恩田陸など最近の作家のものまでバラエティーに富んでおり、読者を選ばない構成となっている。以下、簡単にはあるが本書の内容を紹介してゆく。

本書は、全三部から構成されている。第一部は「読みによる戯曲研究の射程」と題され、「森鷗外『仮面』論」、「岡田八千代『黄楊の櫛』論」、「岸田國士『沢氏の二人娘』論」、「井上ひさし『紙屋町

さくらホテル』論」の四篇の戯曲論が収められている。「総合的に徹底的な読解を通じて従来の作品観の更新を旨とした試みである」と述べられている通り、作品に対する真摯な読解と、先行研究にとらわれない新しい作品観を味わえる第一部は、林氏の真骨頂と言える内容である。

第一章の「森鷗外『仮面』論」では、「鷗外自身の病歴や思想の問題と直接結び付けようとする作家論的」先行研究とは別角度からの読解がなされている。ここで注目されるのは、つい読み過ごしてしまうような細部だ。例えば、冒頭に描かれる〈寒さ〉や、〈博士の為事部屋〉の位置という舞台構成、小道具である〈顕微鏡〉などである。細部を丁寧に読み込んでいくことが〈仮面〉という大きな問題の読解に繋がっていく過程は鮮やかであり、知的興奮が味わえる。このような細部を軽視しない読み方は、なにも戯曲だけに適したものではなく、小説を読む際にもお手本になるだろう。

第四章「井上ひさし『紙屋町さくらホテル』論」では、ヒロシマ三部作の一つと称されながらも、作者のコメントも先行研究のヴァリエーションも少ない「紙屋町さくらホテル」を読み解いている。本作品は歴史を扱った作品であり、登場人物にもモデルがいることから、ついつい読み込み努力を怠りがちだが、本論では史実と作品との間にある〈ずらし〉に注目し、井上劇が考察されている。最後は「おそらく『紙屋町さくらホテル』は井上劇の本質に関わる非新劇性をもっとも見事に体現した作品なのである」と括られており、本書第三部に収められている「近現代演劇史早分かり」の内容を補

完する役割を果たしているとも言えるであろう。井上ひさし演劇に興味がある人にとってはもちろん、近年の演劇史に興味がある人にとっても必読の論稿である。

第Ⅱ部「読みのア・ラ・カルト」には、「谷崎潤一郎『お国と五平』」、「横光利一『愛の挨拶』」、「矢代静一『絵姿女房』——幻のアルト・ハイデルベルク」、「田中千禾夫『マリアの首——幻に長崎を想う曲』」、「渋谷天外『わたらの年輪』」、「恩田陸『猫と針』」、以上六篇の戯曲論が収められている。「手綱をゆるめて馬を自由に走らせるようなつむりの読み解き」という言葉が示す通り、作品に対する様々なアプローチを楽しむことができる内容である。しかし、だからと言って戯曲に対する読みの姿勢が、第Ⅰ部から全くぶれていない点にも注目だ。

第一章の「谷崎潤一郎『お国と五平』」では、あまりに有名であるが故に様々なイメージがついてしまっている谷崎の戯曲を、先入観を取り除きつつ読み解いてゆく。

第二章は、現代では戯作家のイメージが薄い横光利一によって書かれた「愛の挨拶」を徹底的に戯曲として読み、横光の戯作家としての可能性を考察している。また、第四章では田中千禾夫の「マリアの首——幻に長崎を想う曲」を、作品が持つテーマやマリアの首が話し始めるといった大きなプロットにのみ関心を向けるのではなく、主要な登場人物の設定や、象徴的なアイテム「白鞘の短刀」から読み解いてゆき、作品が持つ魅力を炙り出している。

第Ⅲ部「演劇史・戯曲史への視界」には、第一章「近現代演劇史

早分かり 上・下」、第二章「演劇と〈作者〉——山本有三の場合」、第三章「〈演劇の近代〉と戯曲のこぼれ——木下李太郎『和泉屋染物店』・久保田万太郎『かどで』を視座として」が収められている。

第一章の「近現代演劇史早分かり 上・下」は、明治から現代までの演劇史が簡潔にまとめられている。日本の近現代演劇史についてまとめられたものがどれほどあるのか、私は把握できていないが、これほどまでに端的でありつつ明細なものは他にないだろう。第三章では、木下李太郎の「和泉屋染物店」と久保田万太郎の「かどで」の二本の戯曲を読み比べ、新たな側面からの戯曲史（戯曲のこぼれ）が考察されている。第Ⅲ部第二章までの内容（戯曲へのアプローチ方法と演劇史）を踏まえた発展形とも言える章であり、これから戯曲を研究しようと考えている読者にはもちろん、他分野の研究をしている読者にも新たな発想を与えてくれるであろう。

最後に本書のタイトルについて触れておく。「はじめに」において、本書のタイトルは「戯曲を読む術（すべ）」であると述べられている。これを「戯曲を読む術（じゅつ）」と読めば、「戯曲を読む方法」といったハウツーの意味合いを含んだタイトルになるが、林氏は「術（じゅつ）」を求めながら、それが得られぬ切なさのニュアンスを帯びた言葉である「術」にこだわる。これにはもちろん謙遜が含まれているが、本書はハウツー本では味わうことができない〈読みの深さ〉を堪能することができ、やはりこの点においてタイトルは「戯曲を読む術」なのである。しかし、本書を通読することで様々な〈読み〉に触れることができ、読後には「術」を体得したよう

な充足感が得られることも指摘しておきたい。

劇文学という言葉が聞かれなくなつて久しい現在、本書の刊行によつて（戯曲）が再びスポットライトを浴びる可能性を確信しえた。

（やぎばし・ゆうた 平成二十六年大学院博士前期課程修了）